

修理完成記念特集展示

いづみ
あなし

泉穴師神社の 神像

2024年
1月2日(火) - 2月25日(日)
京都国立博物館
平成知新館(1F-1)

泉穴師神社(大阪府泉大津市)は七世紀中頃の創建と伝わる延喜式内社で、大きな勢力をもった神社でした。神社には八十三軀の神像が伝わり、うち平安時代から鎌倉時代に造られた八十軀が重要文化財に指定されています。神像は経年劣化による彩色の剥落や虫損が進んでいたため、公益財団法人住友財団の文化財維持・修復の助成を受け、令和元年(二〇一九)から四年をかけて修理が行われました。今回、修理完成記念として神像二十六軀を展示します。修理でよみがえった顔立ちや文様の美しさをぜひご覧ください。



重要文化財 神像 大阪・泉穴師神社

Feature Exhibition Marking the Completion of Conservation

Shinto Sculptures from Izumi Anashi Shrine

January 2–February 25, 2024

Izumi Anashi Shrine (Izumitsu, Osaka) is said to have been established during the mid-seventh century. The shrine long held considerable influence within the region and is listed as an official shrine in the text *Procedures of the Engi Era* (*Engi shiki*) of 927. Izumi Anashi Shrine houses a total of eighty-three statues of deities. Of these, eighty were crafted during the Heian and Kamakura periods; they were later collectively designated as an Important Cultural Property. The statues began

to deteriorate from insect damage and pigment loss over time. In response, the Sumitomo Foundation generously supported the conservation of these wooden sculptures. The conservation process began in 2019 and was finalized four years later. To celebrate the completion of this project, the Kyoto National Museum is exhibiting twenty six of these statues. We hope that you enjoy the newly revitalized beauty of these deity sculptures from Izumi Anashi Shrine.

泉穴師神社の歴史

泉穴師神社の創建は七世紀中頃と伝えられますが定かではなく、八世紀の史料に和泉国で穴師神社のための徴税の記事が書かれているので、奈良時代に通うことができます。大和にある穴師坐兵主神社（奈良県桜井市）と関係が深く、大和と区別するために泉穴師神社と呼ばれたようです。

平安時代に成立した『延喜式』には全国の神社を紹介する「神名帳」と呼ばれる部分があり、ここには名前がみえる神社を式内社といいますが、そこには「泉穴師神社二座」と書かれています。現在の祭神は天忍穗耳命と栲幡千千姫命という夫婦の神様ですが、江戸時代以前の記録には別の神の名がみえます。『延喜式』に書かれる二座の神については不明ながらも、古代において泉穴師神社は来朝した新羅の使節に飲ませるための神酒を造る稲を出しており、その神威は名高かったと考えられます。

泉穴師神社では神仏習合が進み、遅くとも平安時代後期には神宮寺（神社に附属する寺院）として薬師寺が建てられました。この薬師寺は中世では歴代天皇の崇敬を集めるほど隆盛を誇っていたようです。泉穴師神社に残る神像の多くがこの頃に造られているのも、当社の信仰の盛り上がりとの関係があるでしょう。薬師寺は明治時代の神仏分離令の影響を受けて廃絶しました。

神像について

日本在地の神々は木や岩、山などの自然物に宿るとされてきました。本来目に見えない存在である神々を彫刻で表現するようになったのは、仏教の影響によるものです。神の身を離れて仏教に帰依したいという「神身離脱」の願いのために神宮寺が建てられ、神像が祀られるようになったと考えられます。神像のなかには金色相（全身が金色に輝く）や三道相（首に皺を表す）など仏像の特徴をもつものもあります。

■神像の種類と特徴

神像の種類には、男神（俗体）、女神、僧形、天部形、童子形があります。泉穴師神社では俗体の男神像と女神像に分かれます。神像は膝を小さく造る、または完全に省略するものが多く、体部の彫刻を簡素化する傾向があります。男女二神を二対で造るものが多く、夫婦神とみられます。立像が少なく坐像が圧倒的に多いのも神像ならではの特徴のひとつです。

男神像

朝廷の正装である束帯の姿です。頭には巾子冠と呼ばれる冠を被り、両手で笏を執るか、もしくは両手をあわせるだけのものもあります。老年相と壮年相があります。

女神像

唐装と和装があります。唐装では髪を梳き上げて髻を結び、和装では頭髪を左右に分けて長く垂らしています。若年相と壮年相があります。

男神像（その41） 像高二〇・六

女神像（その60） 像高一九・八

木造 彩色

平安時代・十一～十二世紀

ヒノキの木造。神像の多くは体の奥行きを浅く造るなかで、この二躯はバランスのとれた奥行きを持っています。両像とも頬が張った丸顔に金箔を施しています。男神像は眉間に皺を寄せ目を瞋らせ、手には笏（別材製）を執っています。



男神像（天忍穗耳命坐像・その35） 像高五八・二

木造 彩色 截金

平安時代・十二世紀

女神像（栲幡千千姫命坐像・その44） 像高五一・七

木造 彩色 截金

平安時代・十二世紀



主祭神として祀られる男女二対の神像。ヒノキの一木割彫造。膝の張り出しをもたせず体部の奥行きを浅く造っています。表面は全面に漆を施したうえに彩色、截金で文様を描いています。前回修理は明治三十二年（八九九）に行われ、剥落や退色が進んでいたため、百二十年ぶりに修理が行われました。



男神像（その45） 像高四一・四

女神像（その46） 像高三三・二

木造 彩色 截金

平安時代・十二世紀

ヒノキの木造。男神像は壮年相で束帯の姿、女神像は髪を結って房状に垂らし、唐装に身を包み、もとは持物を執っていました。張りのある丸顔や、截金の文様に共通点があり、同木から造られたとみられます。明治三十二年に修理が行われています。



女神像(その47) 像高三〇・九
木造 彩色
平安時代・十世紀



女神像(その48) 像高二八・〇
木造 彩色
平安時代・十一〜十二世紀



女神像(その49) 像高三四・三
木造 彩色 截金
平安時代・十一〜十二世紀



ヒノキの一木造。それぞれ単独で制作された女神像で、明治三十二年に修理が行われています。(その47)は頭頂に巻髪マクミの髻をふたつ結び、首には仏像の特徴である三道さんどうがあります。顔部と体には量感があり、十世紀頃の作とみられます。

男神像(その1) 像高二四・〇
木造 彩色
平安時代・十二世紀



男神像(その29) 像高二・九
木造 彩色
平安時代・十二世紀



男神像(その30) 像高二・九
木造 彩色
平安時代・十二世紀



八十軀のうち単身像は四十七軀あり、作風・大きさ・技法などそれぞれ異なります。(その1)と(その30)は顔に金箔を施し、(その29)は鑄立しやうたてった目鼻立ちの表現が特徴的です。(その52)は脚部を別材製とし、(その58)は像底に目的不明の掘削痕があります。女神像には本像のように髪を垂らす和装の姿も多く見られます。

男神像(その24) 像高三・三
木造 彩色
鎌倉時代・十三世紀



女神像(その52) 像高二〇・三
木造 彩色
平安時代・十二世紀



女神像(その58) 像高一七・一
木造 彩色
平安時代・十二世紀



男神像(その18) 像高二〇・七
女神像(その68) 像高一九・五
木造 彩色
平安時代・十二世紀

男女二対で造られた像として主祭神を含め計十五組がありますが、X線CTによる年輪の調査から、一具の像は同木から造られたことがわかりました。

男神像(その19) 像高三〇・〇
女神像(その57) 像高二四・八
木造 彩色
平安時代・十二世紀



男神像(その36) 像高三・九
女神像(その50) 像高三・三
木造 彩色
鎌倉時代・十三〜十四世紀



男神像(その23) 像高一八・九
女神像(その55) 像高二六・三
木造 彩色
鎌倉時代・十三〜十四世紀



男神像(その13) 像高一九・六
男神像(その22) 像高二・一
女神像(その51) 像高一九・三
木造 彩色
平安時代・十二世紀

作風と大きさが共通することから、三軀一組と考えられます。肉身に金を施して墨で眉や髭ひげを描き、墨描と彩色で衣の文様を表します。泉穴師神社には金色身とするものが全十二軀あり、神像としてはとても珍しい特徴です。



※すべて重要文化財、大阪・泉穴師神社蔵。
法量の単位はセンチメートル。
※本リーフレットは出品覧を兼ねており、展示作品をすべて掲載しています。ただし、展示順とは一致しません。また、男神像(その37)は展示されません。

■ 泉穴師神社 神像の修理

明治時代に制定された古社寺保存法では、主祭神二軀と男神像軀（その45）、女神像五軀（その46、47、48、49、60）の計八軀は国宝に指定されて、明治三十二年（一八九九）、美術院初代所長である新納忠之介により修理が行われました。

前回の修理から約百二十年が経ち、神像群は経年により塵や埃が付着し、表面彩色の剥落や虫蝕などの損傷が進んでいました。文化財はおよそ五十年から百年に一度の修理が必要であり、繰り返し修理が行われてきたことによつて今に伝わっています。文化財の修理では、これ以上劣化や損傷が進むのをおさえる現状維持修理が原則ですので、修理後の見た目に目立った変化がないことも多くあります。



修理前

男神像（天忍穂耳命坐像・その35）



修理後

■ 虫損・朽損の処置

虫蝕により内部に空洞ができると、木が脆弱になり新たな損傷が広がるため、合成樹脂や木尿漆などの充填剤を用いて虫穴を埋めて補修を行います。ただし今回は、像底が著しく朽損していても樹脂で埋め直すことはせずに、木目の情報をできるだけ残す方針で修理が行われました。



処置前

男神像（その41）



処置後

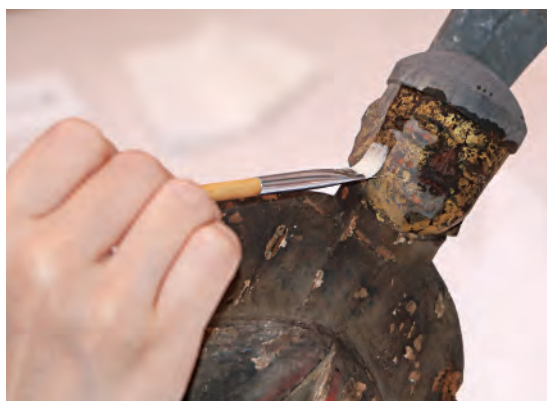
■ 清掃

表面についた塵や埃は筆・刷毛を用いて払い落としします。清掃を行ったことで、彩色のくすみ改善されました。



女神像（その60）

埃除去



男神像（その1）

エタノール水による埃除去

■ 剥落止め

表面の彩色や漆箔が浮き上がり剥離しそうな箇所は、膠水やメチルセロソルス水溶液を用いて剥落止めを行います。



彩色の浮き上がりを養生紙で押さえます

女神像（栲幡千千姫命坐像・その44）



脱落した断片はもとの場所が特定できれば戻します

男神像（その37）



男神像（その1）



男神像（その19）

木部の空洞化の充填



処置前

女神像（その46）

鼻梁が虫蝕により陥没し、すきまに表層部分が落下していたため、取り出して表面に戻しました。



処置後

泉穴師神社蔵木造神像の修理は国庫補助金及び泉大津市補助金、公益財団法人住友財団助成金を受けて、令和元年（二〇一九）から令和四年度に当館文化財保存修理所で公益財団法人美術院により実施されました。

変わり種の緑色絵具 「緑土」が使用されていた神像

泉穴師神社所蔵の神像は、表面に彩色が残るものがあります。今回の修理および特集展示に伴う科学調査では、少し珍しいことがわかりました。緑色の絵具に「緑土」といわれる、神像が造られた平安時代から鎌倉時代には、なかなかお目にかかれない絵具が使用されていたのです。

緑土とは、粘土鉱物の二種で、セラドナイトまたは海緑石という鉱物を主成分としており、元素分析をおこなうと、鉄やカリウムが検出されます。日本では、九州の装飾古墳壁画に多く使用されていることで知られており、六世紀以前の緑色絵具は、一般的に緑土が使用されていたと考えられています。しかし、七世紀にはいると、おそらく仏教伝来とのかかわりから、緑色絵具は、銅を主成分とする「緑青」が広く使用されるようになり、「緑土」はあまり使用されなくなりました。

当初の調査目的は、赤色や橙色、白色絵具の種類を明らかにすることでした。緑色は緑青であると考え、調査の優先順位は低かったのです。しかし調査の最後に、確認のために測定したところ、鉄やカリウムを検出する緑色絵具があったのです。一躍、優先順位が上がった緑色絵具について、さらにX線回折分析をおこない、セラドナイトまたは海緑石のピークを検出しました。緑色絵具の主役の座を譲った「緑土」が、泉穴師神社所蔵の神像には使用されていたのです。

類例では、大將軍八神社（京都市）所蔵神像の緑色絵具からも鉄が検出されていることから、緑土の使用が推定されています。他にも正倉院宝物で数点、平安時代・南北朝時代・桃山時代の磨崖仏・石仏や壁画など数例ですが緑土の使用が報告されています。わずかに使い続けられていた緑土が、緑青とどのように使い分けされていたのか、今後、調査事例が増えると思われるかもしれません。

（京都国立博物館 保存科学室長 降幡順子）



女神像(その51) 右袖部分の「緑土」



蛍光X線分析の様子



「緑土」の顕微鏡写真

関連土曜講座

1月13日(土)「泉穴師神社の神像」講師：竹下 蘭子(京都国立博物館 主任研究員)

2月3日(土)「ポータブルX線分析装置による泉穴師神社所蔵神像の彩色材料調査」講師：降幡 順子(京都国立博物館 保存科学室長)

※平成知新館 講堂にて13時30分～15時に開催。定員200名、聴講無料(ただし、当日の観覧券等が必要)。

※当日9時30分より、平成知新館1階インフォメーションにて整理券を配布し、定員になり次第、配布を終了します。

京都国立博物館

平成知新館(東山七条) KYOTO NATIONAL MUSEUM

京都市東山区茶屋町527 TEL 075-525-2473 (テレホンサービス) <https://www.kyohaku.go.jp/> X(旧Twitter)・Instagram @KyotoNatMuseum

このリーフレットの本文は、京都国立博物館 主任研究員・竹下蘭子が執筆しました。
本展事業実施にあたり、公益財団法人住友財団の助成を受けました。